

【ポスター発表】

「実習前評価システム（短期大学版）」の改良

—学生の実習に向けた学習意欲の維持・向上—

○帯広大谷短期大学 阿部 好恵 (8748)

淑徳大学短期大学部 樋田 幸恵 (5531)

キーワード：実習前評価システム（短期大学版）、フィードバック、モチベーション

1. 研究目的

本研究では、日本社会福祉士養成校協会北海道ブロックが施行する実習前評価システムを踏襲し、本学で考案した「実習前評価システム（短期大学版）」¹を使用する。冬期休暇中の記述式課題「実習前コンピテンス・アセスメント実習に臨む自己の姿勢」（以下、記述式課題）、前提科目を踏まえた OSCE（実習前技術試験：面接試験）・擬似 CBT（実習前知識試験：ペーパー試験）で構成される本システムを A 大学短期大学部（以下、A 短大）で 3 年間試行し、平成 28 年度より相談援助実習指導のプログラムの一つとして実施している。また、2 年間の養成課程に適合し、スクリーニングとしてではなく、事前学習を担保する役割を果たす可能性を広げるため、本システムを継続的に検討している。しかしながら、一部の学生は学習の時間が少なく、合格基準以下で学習意欲が低く、実習は意識しつつ不安を抱えている状況であることが明らかとなった。このため、本研究では相談援助実習に向けた、学生の自己学習意欲の喚起、維持・向上を目指した更なるシステムの改良を行う。

2. 研究の視点および方法

昨年度、本システム施行後の各学生のモチベーションの図示から、春期休暇（3～4 月）や課題・試験間（5～6 月）の時期での意欲の低下が見受けられた。実習への準備期間が少ない短期大学の場合、学生が実習を意識化し効率的に事前学習や準備を進めていくためには、効果的なシステム日程、段階的な課題の設定と自己覚知の促進が必須である。このため、本研究ではモチベーションの低下が危惧される時期に「学習会」、OSCE（短期大学版）を設定するとともに、課題・試験後のフィードバックを改良し、システムを通しての学生の実習に向けた自己学習とモチベーションの変動に着目する。

対象は、A 短大の学生で平成 29 年度に相談援助実習を行う 10 名とした。平成 28 年 12 月に相談援助実習指導の講義内で本システムの説明、記述式課題を配布し、翌年 1 月に課題を回収した。3 月に記述式課題の成績別に 3 グループを作り、課題の各項目に対してコメントを付した「個別フィードバックシート」をもとに各学生へフィードバックを行った。同日「学習会」を開催して「実習前コンピテンス・アセスメントシート（以下、知識群）」を配布し、知識群を用いた学習の方法を紹介した。6 月上旬に OSCE（短期大学版）を実施し、試験終了後フィードバックの時間を約 5 分間設定した。フィードバックの際には、準

備できている項目、準備不足の項目、取り組むべき学習内容、学生の強さの4点を意識的に伝えた。また、課題・試験後に、学習状況やモチベーションに関してアンケート調査を実施した。なお、6月下旬以降擬似 CBT 等を実施する予定であり、詳細は当日発表する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき研究を行った。実習担当教員、学生へ書面及び口頭にて研究協力を依頼した。また、試験結果や調査で得られた回答は統計的に処理を行い個人が特定されないよう配慮すること、科目の成績に影響しないことを伝え同意を得た。

4. 研究結果

アンケート調査の結果から、自己学習の平均時間は、記述式課題が3.6時間、OSCE（短期大学版）が11.2時間であった。また、半数以上の学生が1ヶ月以上前から学習を開始し、テキスト等を使用し、調べ学習を行っていた。OSCE（短期大学版）に向けた学習のきっかけは、実施日が迫ってきたことだけでなく、「皆が予想以上に勉強しているのを見て」や知識群が配布されて「実習のための勉強が具体化されていて取り組みやすかった」ため学習を始めた学生もいた。システム開始からOSCE（短期大学版）後までのモチベーションの10段階評価の平均は、12月2.7、3月5.5、6月7.5であった。OSCE（短期大学版）受験前には実習への不安を述べている学生が多かったが、受験後には「不安も残っているけれど、自分に足りていない部分のわかり、実習に対しての意欲が湧いた」との記述があった。また、フィードバックに関しては「丁寧に指導してくださり自分の弱点を見つけ出せました」、「自分では見えない部分を言ってもらえて、とても参考になった」と述べられていた。

5. 考察

昨年度の学生と比較すると自己学習の時間が約2倍となり、実習へのモチベーションも高まっていることから、システムの改良の効果が伺えた。学生は、自己学習の具体性や実習への現実味がなく不安を抱えているものの、学習の「道具」として知識群を明示し、資料の調べ方等学習「方法」も同時に伝え、課題・試験を設定し先が見通せる「目標」を認識することで、自己学習に着手できることがわかった。さらに、学生相互で自己学習を誘発させており、学生生活に本システムが浸透することも重要であり、日頃の教員による自己学習の促しや環境整備の必要性が示唆された。また、「実習を意識しない」期間を長期間作らないスケジュール、個別のフィードバックにより、学生の状況を言語化・可視化することで学生自身の「気づき」を生むだけでなく、支持的な関わりによって「できない」のではなく「弱み」を前向きに捉え直しており、モチベーションが維持されたとと言える。

¹阿部好恵（2013）「社会福祉士養成教育における実習前評価システムの取り組み」帯広大谷短期大学生涯学習センター紀要（2），55-61.